

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32511

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K21345

研究課題名(和文) 日本漢方黎明期における薬物理論の形成と発展に関する研究

研究課題名(英文) Study on formation and development of the medicinal theory in the earliest days of Traditional Japanese Medicine

研究代表者

鈴木 達彦 (SUZUKI, Tatsuhiko)

帝京平成大学・薬学部・講師

研究者番号：70737824

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本漢方の黎明期の中心人物に、田代三喜と曲直瀬道三がおり、両者の薬物書である能毒書が残されている。田代三喜の薬物書である能毒書について、内藤記念くすり博物館所蔵『当流能毒集』(T0293)のほか杏雨書屋所蔵の『能毒集新撰之方』(乾1801)を見出し報告した。曲直瀬道三の初期の薬物書には京都大学富士川文庫所蔵『能毒全并追加』(ノ15)などを見出した。田代三喜は独自の作字により生薬の表記を行ったが、曲直瀬道三は作字を採用せず、生薬名に点を打つことによって生薬の薬性についての情報を加えている。

研究成果の概要(英文)：TASHIRO Sanki and MANASE Dosan represent in the earliest days of Traditional Japanese Medicine. There are both of their medicinal books; Nodoku. This research presents TASHIRO Sanki's Nodoku, books, "Toryunodokushu" (T0293) in the Naito Museum of Pharmaceutical Science and Industry and "Nodokushushinsennoho" (乾1801) in the Kyou sho'oku Library. "Nodokuzennarabinituika" (ノ15) in the Fujikawa Collection of the Kyoto University Library is regarded as the primary edition of MANASE Dosan's Nodoku books. TASHIRO Sanki uses the original notations as the medicinal names, while MANASE Dosan uses the general medicinal names. MANASE Dosan puts marks on medicinal names for the purpose of indication of medicinal effects.

研究分野：伝統医薬

キーワード：漢方 伝統医薬 生薬 医学史 曲直瀬道三 田代三喜 能毒 本草

1. 研究開始当初の背景

我が国の医学は室町中期頃までは一部の
上流階級や僧侶らによって行われていた。こ
こでの医学は中国の宋代に刊行された『和劑
局方』に記載された処方をもとに、病気にあてがうと
いった、中国医学の模倣であり、場当たりの
な医学であった。しかしながら、禅僧らが中
国に留学し、僧侶が医学を担う我が国の状勢
もあり、医学についての知識も得て来るこ
とで、次第に我が国に医学や生薬についての知
識が蓄積していったとみられる。こうした過
程を経て、中国医学の模倣からの脱却を果
たし我が国独自の日本漢方が興るにあたり、中
心的な人物に田代三喜とその弟子の曲直瀬
道三がいる。田代三喜は患者の症状にあわ
せて1つ1つ生薬を組み合わせてその都度処
方をつくる察証弁治を確立し、曲直瀬道三は
三喜の独特な察証弁治を受け継ぎ、また、新
渡来の中国の医学書を吸収、融合して曲直
瀬道の医学を確立し、日本漢方の礎を築いた。

江戸時代より前の史料は少なく、当該分野
における研究も田代三喜と曲直瀬道三の
人物像や、医学の概要についてのもので大
半である。両者が行った察証弁治は1つ1つ
生薬を選んで処方にするものであるため、医
学の概要を理解するには薬物理論について
の研究は必須の点であるが、両者の薬物書
に関する研究は、25年以上前に宗田一により
曲直瀬道三の薬物書である『能毒』の史料を
いくつか挙げたものがあるのみで、以来報告
がなかった。両者の薬物理論の研究が困難
であるのは、田代三喜の資料が少なく、ま
た、田代三喜が自身で作った独特な作字を
使って生薬名が表記されていることに加え、
曲直瀬道三の時代までの薬物書は印刷され
た刊本ではなく、手で写された写本であり、
類似するものが多く存在し、かつ内容が書
き換えられていっているところである。

2. 研究の目的

独自の発達を遂げた我が国の漢方医学の
黎明期にあたる室町後期から江戸初期の本
草(薬物書)資料を調査、整理し、薬物理論
を解析し明らかにすることを目的とする。我
が国の薬物理論において、独自の形成を促
したのは、仏教医学の影響によるものとみ
られ、これらの概念が如何に薬物理論に影
響し、治療法に寄与したかを、当時の漢
方処方や治験例の解析により明らかにす
る。また、中国の影響下から離れ、一旦は
独自に展開した薬物理論が、時代を経てど
のように伝承され、経時的にもたらされる
新しい中国の理論と如何に融合し、発展
したかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 田代三喜の作字に関する資料を調査
する。田代三喜の能毒、薬物書は京都大学
富士川文庫に1点、武田振興財団杏雨書屋
に1点蔵書があり、比較検討を行い、作字
と薬物理論との関係性を明らかにする。

(2) 田代三喜から受け継いだとみられる
曲直瀬道の能毒書について調査を行い、比
較検討により、編纂過程を明らかにし、薬
物理論の形成と発展を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 田代三喜の能毒書について

曲直瀬道三の『薬性能毒』には写本、刊本
を合わせて種々の資料が残されている。「能
毒」という用語は、直接的には道三の師で
ある田代三喜の『当流能毒集』からとられ
たとみられる。田代三喜は生薬の表記につ
いて生薬の効能から作字をつくり、表記す
る文字自体に意味を持たせて生薬の運用に
役立てたと考えられる。

三喜の能毒書と処方理論との関係を見る
と、『和極集』という田代三喜の治療法を
伝える医書がある。本書では、患者の症
状を記し、次に養胃湯、補気湯といった
処方名、気順、気散、血補といった区分、
続いて独特な作字で生薬名を書き、中
にはその後加減方が続くことがある。基
本的には患者の症状にあわせて、その都
度一つ一つ生薬を配して処方を組み上げ
ていく察証弁治のスタイルである。一方、
曲直瀬道三の『出証配剤』を見ると、患
者の症状を記し、それを書いた脇に直
ちに生薬を配して処方を作り上げるとい
う同様の察証弁治を見ることができる。こ
うした察証弁治を行うには整理された薬
物理論が必要になることは容易に想像で
きる。

内藤記念くすり博物館所蔵の『當流能
毒集』(T0293)は田代三喜の薬物書の原
書にもっとも近いものと思われる。『和
極集』にも共通していることだが、『當
流能毒集』の生薬の表記は一般的なも
のではなく、田代三喜独自の作字によ
ってなされる。いくつかのへんやつくり
を組み合わせ、「昔」は散、「二火」は痰、
といったようにそれぞれに意味を持た
せて作字自体が生薬の薬能を示してい
る。また、生薬の分類は五臓に基づいて
おり、生薬ごとに気味や修治法、薬能、
禁忌や不適應症など、の3つの項目を
記している。独自の作字はもちろん、分
類や記載法は中国の伝統的な本草書と
は形式が異なり、各々の薬能の記載に
関しても、中国書の引用ではなく田代
三喜独自のものとみられる。生薬の薬
能を作字によって表現する方法や、五
臓を重視した分類法などは、仏教医学
の影響によるものと理解することができ
る。

(2) 曲直瀬道三の初期能毒書の成立について

三喜の『當流能毒集』に近似した内容
を持つ能毒書として、以下の3系統の
能毒書がある。京都大学附属図書館富
士川文庫所蔵『能毒全并追加』(ノ/5)、
武田科学振興財団杏雨書屋所蔵『薬
性能毒』(乾5329)およびエーザイ
内藤記念くすり博物館所蔵『當流日
用薬性捷徑』(37982)を見出した。以
上の3書は仏教医学の五輪砕をもとに
した三喜独特

の作字や、五臓を中心とした生薬の分類は採用しないが、主治文はいずれも三喜の『当流能毒集』を引用したとみられる。成立時期に関しては、杏雨書屋に注目すべき資料が所蔵される。『救急本草』(杏 1838)は書名には「能毒」を含まないが、前半部を欠いた能毒書とみられる。おそらくは前半部がないために、仮に書名がつけられたのであろう。本書は『能毒全并追加』の系統の能毒書とみられるが、巻末に「天文十八巳酉(1549年)十一月至日雖知苦芥主道三記之」とあり、本研究における調査において最も古い年記がある能毒書である。

(3) 曲直瀬道三の能毒書における生薬の表記について

曲直瀬道三の薬物書のうち、成立の古いものとみられる龍谷大学図書館所蔵『能毒』(690.9/431-W)、京都大学富士川文庫所蔵『能毒全并追加』(ノ/5)では、田代三喜の能毒書に見られるような作字による生薬の表記は見られず、分類も五臓ではなく、使用頻度の高いものを示すとみられる「常用」とそれ以外の「日用」に分けて生薬を収載する。しかしながら、薬能の記載は簡素化をしながらも、田代三喜の薬能と共通するものが多くみられる。さらに、田代三喜の作字は薬能を意味するへんやつくりで構成されているが、曲直瀬道三の能毒書では薬名の四方や中央に点を打ち、点を打つ位置によって五味などを表しているとみられる。作字というあまりにも独創的な方法は避けてはいるが、生薬の表記そのものに薬能を類推させる印をつけることは、田代三喜の影響を受けているといえよう。また、各々の生薬の記載は、薬能と禁忌などになっており、これも田代三喜の記載法に準じている。

田代三喜の薬物理論は作字や五臓による分類があらわすように仏教医学の影響がうかがえ、薬能は田代三喜独自のものである。曲直瀬道三の薬物書は田代三喜の影響があり、これを生かして察証弁治による医術を行ったとみられる。作字など仏教医学の影響を排除して一般化を図りながらも、多くの部分で田代三喜の薬物理論を継承していったと考えられる。田代三喜の『当流能毒集』では生薬の効能から作字をつくり、表記する文字自体に意味を持たせて生薬の運用に役立てたと考えられる。曲直瀬道三は三喜独特の作字は採用しなかったが、生薬の表記に薬能の一端である気味について視覚的な情報を加えており、薬能、毒の項目をつくって記載するのも含めて、田代三喜の影響を受けているとみなせる。点を打つことによる気味の表記は、刊行されたものでは文章化されているなどして見られない。

(4) 曲直瀬道三の初期能毒書から派生した能毒書について

曲直瀬道三の初期能毒書二は京都大学附

属図書館富士川文庫所蔵『能毒全并追加』(ノ/5)、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵『薬性能毒』(乾 5329)、およびエーザイ内藤記念くすり博物館所蔵『當流日用薬性捷徑』(37982)に代表される3系統の能毒書がある。以上の3書は仏教医学の五輪砕をもとにした三喜独特の作字や、五臓を中心とした生薬の分類は採用しないが、主治文はいずれも三喜の『当流能毒集』を引用したとみられる。しかしながら、引用の仕方は3書において同一ではない。このうち『能毒全并追加』からは仮名まじり文の能毒書が派生したとみられる。これを仮名能毒系とする。仮名能毒系のものには内藤『能毒全部』(44365)、および、『仮名能毒』と称される資料があり、昭和期には翻刻された。『薬性能毒』(乾 5329)の主治文は『注能毒』と称される刊本に引用されたとみられる。これを注能毒系とする。注能毒系は三喜から受け継いだ主治文について注釈を加えた系統の能毒書である。内藤『能毒』(T0389)および内藤『能毒』(36992)は注釈のみを収載した資料であるが、これらの注釈文と『薬性能毒』(乾 5329)の主治文とを合わせて注能毒系の能毒書が成立したと考えられる。注能毒系は江戸期に刊行を重ねた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 5 件)

鈴木達彦、日本漢方黎明期における漢方処方命名法に関する研究、日本薬学会第137年会、2017年03月24日~2017年03月27日、仙台国際センター(宮城県仙台市)

鈴木達彦、曲直瀬流の「能毒」について、日本東洋医学会千葉県部会(招待講演)2017年01月29日~2017年01月29日、千葉市生涯学習センター(千葉県千葉市)

鈴木達彦、日本漢方黎明期における薬物理論について、第11回鍼灸学校教員のための古典講座(招待講演)2016年08月07日~2016年08月07日、北里大学(東京都港区)

鈴木達彦、田代三喜から曲直瀬道三へ - 日本漢方の黎明期における薬物理論の継承、第67回日本東洋医学会学術総会、伝統医学臨床シンポジウム(招待講演)2016年06月03日~2016年06月04日、サンポートホール高松(徳島県高松市)

鈴木達彦、鈴木美津穂、並木隆雄、曲直瀬道三『薬性能毒』と杏雨書屋所蔵『救

急本草』に関する研究、第 117 回日本医
史学会、2016 年 05 月 21 日～2016 年 05
月 22 日、広島県医師会館(広島県広島市)

〔図書〕(計 1 件)

武田科学振興財団杏雨書屋編、武田科学
振興財団、曲直瀬道三と近世日本医療社
会、2015 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 達彦 (SUZUKI, Tatsuhiko)

帝京平成大学・薬学部・講師

研究者番号：70737824